自ら思案して「私の年祭活動」を

修養科の朝礼前。修養科では多くの人との関わりの中で思案を深め、心の成人を目指す。

教祖がお記しくだされたおふでさきは、

これをはな一れつ心しやんたのむで　十七号　75

とのおうたで締めくくられ、親神様の思召を思案することの大切さをお示しくだされています。

私たちは一人ひとり性格も個性も違えば、所属する教会も違い、住んでいる環境も違います。信仰初代の方もいれば代を重ねた方もいます。得手不得手もあり、それぞれの持つ徳分も、立場もすべて違うのですから、たとえ同じ出来事に直面しても、一人ひとり思案すべきことは違ってくるでしょう。

年祭活動を進めていくにあたって大切なことは、「自分はどのようにしてひながたの道を通ればいいのか」「教祖なら、どんな心でお通りくださるのか」と、まずは一人ひとりが、親神様の思召、教祖のひながたに沿って、自ら思案することではないでしょうか。

「心一つが我がの理」とお聞かせいただくよう、私たちは心を自由に使うことができます。教祖にお喜びいただけるよう、心を動かし、心を使い、心を定めて、自ら思案して実行する「私の年祭活動」を勤めさせていただきましょう。

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

しやんして心さためてついてこい
すゑハたのもしみちがあるぞや　五号　24
さあしやんこれから心いれかへて
しやんさだめん事にいかんで　十六号　79

四方正面

「お道のおたすけは究極のお節介」とは私の持論である。お節介とは出しゃばって世話を焼くこと、不必要に人のことに立ち入ること、とある。

大阪に、石像に水を掛けると願い事が叶うとされている寺がある。長年の水掛けのお陰でコケがびっしりと生えていたが、ある参拝者がそのコケを取ったため、寺の住職が被害届を提出した。後日、その参拝者が、また石像の頭を拭う行為をしていたため問い詰めると、「コケでみすぼらしかったので、きれいにしてあげた」と謝罪した。行為そのものに悪意は全くない。しかし、寺からすればお節介に過ぎず、許される行為ではない。

お道でのおたすけは、たすかりたいと相手が心から願い、たすかってほしいという、こちらの真実が合致したとき、成立するように思う。しかし今の旬、率先してお節介をし、おたすけがいつでも成立できるよう、自らの心づくりに励ませていただきたい。（木）

《３月月次祭　挨拶》

教祖の御心を学び、教えの実践を

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、日頃はたすけ一条に勇んでお励みくださいまして、ご苦労様でございます。コロナ禍の大変な中を、３月の月次祭も皆様と共々に、無事滞りなく勤めさせていただきましたことは、大変有り難い次第でございます。

さて、今年は、来年から始まる教祖百四十年祭に向かう年祭活動に臨むための「心づくりと理づくりにつとめる年にしよう」と申し合わせてきました。理づくりとは、信仰実践によって培っていくものですが、心づくりの心とは、親神様にお受け取りいただき、教祖にお喜びいただく心である、と以前話をしました。では「心づくり」とは、具体的にどういうことなのかについて、少し話をしたいと思います。

教祖の年祭活動は、

まあ十年の中の三つや。（中略）僅（わず）か千日の道を通れと言うのや。（中略）ひながたの道より道が無いで。

明治22年11月７日

とおさしづで示されるように、年祭活動は三年千日と仕切って教祖のひながたを徹底して辿らせていただくことが主眼であり、芯の部分であります。

私も会長に就任してから年祭活動を３回経験しましたが、活動という呼び名がついていますから、動き、活動に重きを置いてきたように思います。修養科生500名や初席者１千名などの目標を立てて、一手一つに丹精をしたこともありました。毎日お願いづとめを勤めて、おさづけの取り次ぎに励み、おたすけ活動を推進するなど、その旬々に勇んだ動きがありました。

こうした動きは年祭への活動として実に意味のあることですし、次の三年千日もその旬に相応しい動きを起こしていかなければなりません。しかし、いくら良い活動であっても、その根底にある「教祖のひながたを徹底して実践する」という芯の部分を疎かにしていては、せっかくの活動が教祖に届かないのかもしれません。

これは振り返っての私自身の反省でもあります。「教祖のひながたをしっかりと通らせていただきます」という固い心定めをもって臨むのが、三年千日の年祭活動であると思います。

このひながたの道ですが、教祖御在世当時と今とでは時代が違いますし、お道を取り巻く状況も変わってきていますので、全く同じ道を通るということはかないません。教祖がなされたように、すべての教会が土地建物を売却し、貧に落ち切れば信者さん方の拠り所を失うことになりますし、ようぼくがおつとめを勤める場所がありません。また教祖は度々と警察や監獄に御苦労くださいましたが、今私たちがいくら熱心におつとめを勤めても、警察に拘留されることはありません。このように具体的な事柄を挙げれば、できることもあれば、できないこともあるのが当然と言えば当然であります。

私たちの信仰は教祖のひながたが目標ですが、大切なことは50年の道すがらの、その時その時の教祖の御心を学ばせていただいて、その御心を今に生かして、一人ひとりが今を通るということだと思います。ひながたを目標に道を歩むためには、「教祖ならば、こんなとき、どうなさるだろうか」という思案が大切になります。

しかし、自分勝手な教祖像を頭に描いていては、道から逸れていくことになります。そうしたことにならないためにも、改めて教祖のひながたの道に正面から向き合って、教祖の御心を学ばせていただかねばならないと思います。お互いに今一度『稿本天理教教祖伝』『稿本天理教教祖伝逸話篇』に親しませていただき、ただ文字面だけを追うのではなく、その奥にある教祖の御心をしっかりと学ばせていただきたいと思います。

教祖が通られたひながたの道は、天保9年10月26日から明治20年陰暦正月26日までの50年です。今から百数十年前の出来事ですが、だからといって、単なる昔話に済ませては決してなりません。50年のひながたの道の根底にある教祖の御心は、御存命の教祖の御心として今に生きています。

教祖ひながたの道に改めて目を向けて、教祖の御心を学ばせていただき、そしてただ学ぶだけではなく、自分の心遣いを省みて、「自分はどうなんだ」という観点に立って、教祖の御心に近づかせていただくための「心のふしん」をすることが、年祭活動に臨む心づくりであるとお考えいただきたいと思います。そして、気付いたとき、気付いたことから、教祖の御心を今に生かして道を歩み出し、教祖がお説きくだされた教えを素直に実践して、成人への努力を重ねて年祭活動を迎えたいと思います。

どうか教祖にお喜びいただけるように、今からその歩みを進めさせていただきたいと存じます。一歩一歩と着実に、そして心勇んだ成人の足取りをお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。

なお、世話人・島村廣義先生のご巡教は、6月の月次祭に延期になりました。どうぞよろしくお願いいたします。

今月の月次祭、大変ご苦労様でございました。（要約）

立教百八十五年　三月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけ上げたいとの深き親心から、尽きせぬ御守護にお護り下され、時には厳しいお仕込みを以って成人を促されて、只管陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。

私共は、親神様の思召にお応えできるよう、心の入れ替えに努めて、たすけ一条の道に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、三月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前にはコロナ禍の出にくい中を参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御守護に御礼申し上げ、たすけ心を湛えて相共につとめに勇む状をも御照覧下され、親神様にもお勇み下さいまして、遍く世界に御恵みをお垂れ下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、年祭活動に臨む心構えを確と持って、教祖のひながたを目標に日々の道に励み、たすけ一条に真心を尽くして、心を揃え直向きに成人の道を歩ませて頂く所存でございます。

何卒この上共に温かき親心にお導き下さいまして、時旬に相応しい成人の御守護を賜り、教祖年祭を一つの節として、陽気ぐらしへの末代かけてのたゆみなき歩みを、一手一つに力強く進めさせて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願申し上げます。

《3月月次祭　神殿講話》

教祖年祭に向け 心を定めて日々を通ろう

役員　湯川正圀

かぐらづとめを拝して

只今は、新型コロナウイルス第6波が流行っております。私の身近なところでも、ウイルスに感染して苦しんでおられる方がおります。

　またロシアがウクライナに侵攻を始め、それに対して反対している国々がロシアに対して経済制裁を行っています。こうした現状を考えたとき、私たちは、どのような通り方をすれば治めていただけるのでしょうか。

　おふでさきに、

このよふをはじめかけたもをなぢ事
めづらし事をしてみせるでな
六号　7

このよふをはじめてからにないつとめ
またはじめかけたしかをさめる
六号　8

はや〳〵と心そろをてしいかりと
つとめするならせかいをさまる
十四号　92

とあります。おぢばで勤められるかぐらづとめを真剣に拝しておすがりすることが、病の根、謀反の根を切って、世界治まるという御守護を頂けると思うのです。

　ですから、私たちは、毎月のご本部祭典に参拝させていただくことが、まず何より大切なことではないかと思います。

　私はかぐらづとめによって、身上を御守護いただきました。

　平成元年に、ご本部の集会員という御命を頂きまして、結界の中で参拝をさせていただくことになりました。真柱様をはじめ、つとめ人衆の先生方がかぐら面をつけ、それぞれの御守護の手を振られる。それを初めて拝し、感激しました。

　実はそのとき、私は身上を頂いておりました。以前に肋骨と肋骨の間が痛くなりましたが、辛抱できないくらいの痛さではないので、そのまま放置していました。3週間ほどで痛みは取れましたが、しばらくしたら今度は手の平にできものが出てきて、続いて足の裏にも出てきました。そしてだんだん膿をもってきました。

　慌てて病院で診察してもらったのですが、病名がないそうで、手の平、足の裏の膿疱（のうほう）症ということで、ステロイドを頂きました。

　そうして薬を飲むと、2、3週間ほどで治まってくるのですが、今度は皮が剝（む）けて、きれいになるまで3カ月かかりました。ところがすぐに再発して、しかも何度も繰り返すのです。できものができて、膿んで、薬を飲んで、治まる。またすぐにできてと、これを3カ月ごとに年に4回繰り返して、それが10年間続きました。

　そして10年続いた時に、結界の中で参拝ができるようになりました。その1年ほど後、結界の中で参拝をさせていただいているとき、ある方から、「和歌山の病院でそういう研究をしている」という情報を聞き、その病院へ行きました。いろいろと検査をした結果、「おそらく扁桃腺（へんとうせん）の菌の影響でしょう。扁桃腺を取りましょう」ということになりました。

　私も10年間悩んでいましたので、7月末に手術をすることに決まったのですが、ちょうどその頃、私の次男が天理高校の野球部におり、甲子園に行くチャンスがあったのです。そこで「できれば秋に延ばしてほしい」とお願いして、手術は延期になりました。ところが秋になると、薬も飲まないのに、できものが少なくなっていました。お医者さんも「もう少し様子を見ましょう」ということになり、12月に手術を延期しました。

そして12月になると、不思議にも、本当にきれいにすっきりとできものが治ってしまいました。

とのよふなむつかしくなるやまいでもつとめ一ぢよてみなたすかるで

十号　20

10年苦しんだのが、かぐらづとめを参拝させていただくだけで、すっきりと御守護を頂きました。

それから25年ほど経ってからの話ですが、なんとなくテレビを見ていると、いろいろな病気の特集をしていました。たまたまその時に、「手の平にできものができて」と聞こえたので、よく見ると、私と全く同じ症状でした。これほど

医学が進んでいても、今でも原因が分からず、薬もないそうです。

そして番組の最後にお医者さんが「この病気は100万人に1人の病気です」と言っていました。本当に驚きました。100万人に1人の難病でも、かぐらづとめでたすけていただけるのです。このテレビ番組は、私にとって「御守護を忘れずに通りなさい」という神様のメッセージだったと思います。

私たちに今できることは、新型コロナの治まり、戦争の治まりを願って、かんろだいのかぐらづとめを真剣に拝することです。また、親神様の出張り場所である、それぞれの教会でしっかりおつとめを勤めることが、私たちの務めではないでしょうか。

今の状況がいつまで続くかは分かりませんが、御守護を信じておつとめを勤めさせていただくことが、世の治まりに繋がっていくと思います。

心を定める

今年の1月、教会で朝づとめを勤めていますと、部内の信者さんが参拝に来ておられました。話をすると、「日方分教会の創立130周年記念祭が来年1月に勤められると聞いたので、仕事も定年になったし、月1回、必ず参拝させてもらおうと思って、今日は参拝に来ました」とのことでした。その方の家から教会までは上り坂で、自転車で1時間半くらいかかるので、おそらく朝5時ぐらいに家を出てきたと思うのですが、心を定めて来てくださいました。

私も嬉しくなって、来月の月次祭に来てほしいと言うと、2月の月次祭に来て、おつとめに出てくれました。おつとめが終わって、「よく来てくれたね」と声をかけると、その方が「実は1月に参拝したとき、先生の喜んだ姿を見て、来月の月次祭に参拝させてもらおうと心に決めたんです。すると、今まで勤めていたところから『もう1年勤めてほしい』という連絡があったんです」と喜んでおられました。「今年一年、月1回お参拝をさせていただきます」との心定めが、喜びを頂いた元ではないかと思うのです。

私は今、おぢばへの日参をさせていただいておりますが、これは教祖百三十年祭の年祭活動の3年目に心を定め、始めました。

そして年祭を喜びの内に参拝させていただいたのですが、真柱様が「年祭活動として行ったことを、これからも活動として続けてほしい」というお話をされましたので、改めて「あと2年続けさせてもらおう」と心に決めて、ちょうど丸3年、日参をさせていただきました。

すると、今度は大教会の創立130周年記念祭で『日々プラス1』を合言葉に、毎日何か一つでも、神様にお喜びいただけることをしよう」と申し合わせました。そこでもう一度仕切って、「創立130周年に向けて、日参をさせてもらおう」と心定めをしました。

そして130周年を終えた後、大教会長様が、「130周年を終え、次は教祖百四十年祭です」と仰せくださいました。それで、また改めて仕

切って、心を定め直しました。今は教祖百四十年祭に向かって、心定めを実行している道中です。

大難を小難に

２年前、家内とご本部に参拝させていただいた後、詰所にお手洗いに立ち寄りました。私は先に済ませて車で待っていたのですが、家内がなかなか戻ってこない。すると事務所の方が「先生、奥さんが倒れています！」と呼びに来てくれました。つまずいて、壁に強く頭を打ったようでした。

一旦、橿原にある教会に連れて帰りましたが、一時間ほど経った頃に「頭が痛い」と言い出したので、近くの病院に連れて行きました。最終的には大きな病院でＭＲＩを撮って調べてもらうと、「脳から出血していて、血管が破れる可能性があるから、すぐ入院してください」と言われて入院しました。

おかげさまで、血管が破れることもなく、無事に退院したのですが、４、５日すると、だんだんと身体が動かなくなってきました。「入院して寝たきりだったから、筋肉が弱っているんだろう」と思っていたのですが、改めて病院で診てもらうと、脳の血管から血が滲み出ていて、そのまますぐに手術になりました。その後、10日ほど入院して、無事に退院できました。

もし家内が１人のときに頭を打っていたら、今頃どうなっていただろうか。そう思うと、大難を小難にしていただいて、本当に有り難いと思います。

私たちは何事にも、まず心を定めることが大切ではないかと思います。年祭活動の始まりにあたり、何か自分でさせてもらうことを誓って実行することで、大きな喜びをいただく場合もあるし、大難は小難、小難は無難にとお連れ通りいただくことになると、私は思います。

教祖の年祭活動に向かうにあたり、まずはしっかりと心定めをして、これからを通らせていただきたいと思います。

（要約）

三月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扉者	岩切正教	扉者	瀧本庄司
指図方	井筒文夫	賛者	西本義之	賛者	瀧本亘
献饌長	瀧本眞二郎	伝供	在籍者一同		

	座りづとめ	前半	後半
てをどり	大教会長 湯川正圀 岩切正教 会長夫人 前会長夫人 榎理恵子	瀧本眞二郎 竹内義忠 吉田裕和 吉田幸子 梶川りよ子 立花章子	河合善洋 新居里実 吉田裕樹 浜田千代実 河合ふみ子 湯川照代
地方	奥田正徳 石川道夫 奥田眞治	加世田洋 立花善文 浜田宣郎	岡本久昭 西本興正 湯川正信
笛	守田清一	木村真次	瀧本一太郎
ちゃんぽん	岩切正義	中村俊和	村田光伸
拍子木	井筒敏成	立花善三	花岡忠和
太鼓	今川政治	葭内浩	今川聖一
すりがね	岡島秀男	石川健郎	榎康紀
小鼓	山田道弘	樋川泰士	川畑正博
琴	中村美津代	川畑祝子	岩切治代
三味線	井筒ちぐさ	山田秀子	中村寿々代
胡弓	岡島きよの	竹内淳子	加世田陽子

大教会春季霊祭執行

3月24日、大教会神殿、祖霊殿で春季霊祭が厳かに執行された。

午前10時より、神殿の儀で大教会長が祭文奏上。続いて十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀を勤めた。

大教会長は祭文の中で、「幾重の事情も乗り越えて、今日の成人の姿を御守護頂いておりますのも、親神様、教祖の厚き親心に導かれてのことではございますが、また一つには祖霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜」と、先人たちへの労いと感謝を申し述べ、更には今後、教祖年祭活動の旬に向けて、心を揃えて通ることを誓われた。

祭員列拝の後、在籍者、教会長、各会の代表者と、今回合祀を願い出た今川家が祖霊殿前に参進し、参拝した。

祭典終了後、大教会長が挨拶。「苦労や大きな事情の中をお通りくだされた先人たちのお陰を頂いて、今日の芦津が、それぞれの教会が、それぞれの家がある」と、先人の歩みに対して感謝を述べ、「先人への感謝の思いを常時持つことが理想だが、少なくとも春秋の霊祭月には、祖霊様方の今までの道すがらに思いを馳せ、感謝し、お礼をさせていただきたい」と、霊祭を勤める意義に触れられた。

更には、「道は末代ですから、私たちの後に続く人もたくさんいる。私たちは、そうした後に続く人たちから『あの人のお陰だ』と思いを寄せてもらえるような日々のつとめを心掛けて通りたい」として、話を締めくくられた。

春季霊祭合祀

3月24日、春季霊祭において、新たに合祀されました。

今川清子之霊
東津分教会四代会長夫人
多津分教会五代会長

立教百八十五年　春季霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊藏の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代教会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようぼく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し合わせて祀る東津分教会四代会長夫人、多津分教会五代会長今川清子の霊様、合せて壱千四百九十四柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

初代真柱様並びに本部三柱の霊様には、道の芯としてようぼくの先頭に立たれ、世界たすけにご丹精をお重ね下さいました。お蔭を以ってこれの御教えの道が伸び開けて、今日のたすけ一条の道がございます。又、初代梅治郎の霊様には、教祖より賜りました「大阪に大木の根を下ろして下されるのや」との尊きお言葉のまに〳〵、眞明芦津の親として、いかなる中も神一条に徹せられて、にをいがけ・おたすけに、修理丹精の上に誠を尽くされ、お屋敷に在っては、ぢば一条に真実を尽くし運び、真柱様に真心厚くお仕え下されて、今日の眞明芦津の道の礎をお築き下さいました。又、夫々の霊様には親神様の奇しきお手引きによって、道の草分けの頃から今日に至るまで、代々ならん中をも神一条に真実を伏せ込まれ、或は国々処々に在って、艱難苦労の道すがらも心倒さず真心を尽くして、たすけ一条にお勤め下さいました。

これの道が年と共に結構をお見せ頂き、幾重の事情も乗り越えて、今日の成人の姿を御守護頂いておりますのも、親神様、教祖の厚き親心に導かれてのことではございますが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とてございません。その中にも今日のこの日は、今年の春の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので、只今は一同陽気に十二下りのてをどりを勤めさせて頂きましたので、御前に種々の心尽しの物を供えて、在籍者をはじめ、参り集う人々と共に、ご遺徳を称え、御生前の御丹精を改めて厚く御礼申し上げたいと存じます。

私共をはじめ芦津の理につながる教会長、ようぼくは、年祭活動に臨む旬に在って、教祖のひながたを目標に信心に励み、一層勇んで成人の道を歩ませて頂きたいと存じます。何卒一同の真心あふれる丹精を御心安らかにお受け取り下さいまして、皆が心を揃えて時旬の歩みを進ませて頂けますようお見守りの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

学生生徒修養会・大学の部

学生生徒修養会・大学の部が、3月2日から12日にかけて、全2回4泊5日の日程で開催された。

今回は「ひのきしん―感謝を実践に」をテーマに、全国から498名の学生がおぢばに集い、仲間と寝食を共にしながら教えを学んだ。

コロナ禍の影響でこの2年は多くの仲間と語り合うことができなかったが、3年ぶりに開催された今回は、グループワークを中心に「かしもの・かりもの」「ひのきしん」などの基本教理を学び、仲間と練り合う中で、信仰を磨くとともに友情を育んだ。

また回廊拭きや神苑周辺の除草作業などのひのきしんでは、共に汗を流し、教えの実践に励んだ。

芦津からは9名が受講。「いろいろな人の話や意見を聞いて、新しい発見や、自分に足りないところに気付かされた」「かりものの身体を使ってひのきしんができることは、本当に有り難い」「改めて御守護に感謝することの大切さを学んだ」「寝起きできることが当たり前ではない。普段の何気ないことが有り難い」など、さまざまな気付きや成長を得た、貴重な期間となった。

受講者は次の通り。

第1回（写真上　右より）

武市満美（勝明）、山本日奈子（昭大）、奥田陽人（周宝）、岩切大道・岩切大樹（四ツ山）

第2回（写真下　右より）

吉田大樹（今津原）、濵本元徳（島原港）、武波直輝（東大木）、瀧本昂郎（紀周）

教会長子弟育成者研修会

育成部

3月24日、大教会春季霊祭終了後、育成部は大教会で、「教会長子弟育成者研修会」を開催。今年は、直前まで大阪府にまん延防止等重点措置が発出していたため、各直属の育成責任者（直属教会長夫妻）のみが対象で、46名が参加した。

この研修会は、教祖百三十年祭後にご本部から発表された「教会長子弟育成プロジェクト」に基づき、立教180年から毎年開催しているが、「教会に生まれた子弟すべてを、教会になくてはならない人に育てること」を目標に、教会長の意識向上と、さまざまな育成の手立てを考える機会としている。

最初に大教会長のお話。本部勤務者や親里の学校に進学する子弟が減っていることに言及され、おぢばで学ぶことの意義について、中田善亮・表統領先生の「おぢばで生活をすれば、おぢばが本当の故郷になるから」とのお話を引き、「おぢばで過ごす、伏せ込むことは大切。そうした機会をつくっていくのが育成側の一つの役割」と述べられ、意識向上を促された。

（要旨を9～11頁に掲載）

続いて、昨年11月に開催された「道の後継者の集いⅡ」の様子をまとめたビデオを視聴し、山田道弘・育成部長が挨拶。「私たちの心一つ、理づくり一つで、どんな御守護を頂けるか分からない」と、育成する側の心構えを語った。

最後に、梶川和人部員が教会家族名簿の更新と活用について説明し、研修会を終えた。

《教会長子弟育成者研修会におけるお話》

子弟の育成に おぢばで過ごす機会をつくろう

大教会長　井筒梅夫

信仰が伝わっていない

子弟を道に繋げていくことは、「末代の道」ということを考えれば、私たちがしなければならない大切な御用の一つであることは、お互い重々承知しているところです。

今、本部が抱えている一つの大きな問題で、部署を持っている私たちが頭を抱えているのが、「勤務者の減少」です。ものすごく減ってきています。私が布教部長になったときと、5年後に布教部長を勤め終えたときで、布教部の勤務者が約半分になりました。

今、私は保安室にいますが、保安室も今年20数名辞めて、新しく入ってくる人はその半分ほどです。ですから現在のような保安体制をとるのも、立て直すのも、並大抵ではない状況です。

こうして減ってきた理由は、よく「少子化」だといわれます。もちろんそれもあると思います。

また、一れつ会に扶育を願い出る人が減ってきました。それは、今は給付型の奨学金が出てきていますし、公立の学校が無償化になってきました。私立学校も就学助成金が出るようになってきた。そうしたことを思えば、おぢばの学校で寮生活を送ればそれなりの費用がかかる。それなら、子供を自分の近くに置いておきたい、という思いの人もあるということを聞きます。

しかし、そうしたことは枝葉末節の問題です。一番肝心なところは「信仰が子弟に伝わっていない」「自信をもって道を通る人が少なくなってきている」というのが第一の理由であると思います。

昨年、本部へ教会のお戻りがありましたが、全教で3千カ所ほどになりました。芦津からも32カ所、お戻りいただきましたが、「後継者がいれば何の問題もなかった」という教会がほとんどです。

お道の雰囲気の中で

おぢばの学校に入る人も少なくなってきました。天理高校一部は、今年は受験者全員が合格しましたが、その大半はラグビーやバレーボールなどのスポーツ関係での入学です。教会長子弟、ようぼく子弟は、二部を合わせても片手を超えるくらいです。教校学園高校が募集をしていたときは、一時期、教会長子弟、ようぼく子弟だけで10数名が入っていましたが、今は激減しています。

勤務者も激減し、高校生も減っているということは、「おぢばで一定期間を過ごす子弟が減ってきている」ということです。

おぢばでの学生生活を送り、勤務をするなど、親里に住むこと、学ぶこと、伏せ込むことは、周囲がほとんどお道の人ばかりですから、お道の雰囲気の中で過ごし、成長することができます。これが大切だと思います。

子弟育成をする上で雰囲気は非常に大切です。教えがいくら立派であっても、教会の雰囲気や家族の雰囲気が良くなければ、子供たちは付いてきようがありません。

おぢばに置いていただいたら、やはりおぢばの雰囲気の中で育つことができます。

そしてその後、大教会や上級教会に伏せ込む。例えば大教会に伏せ込んでも、周囲は自分の家族以外の信仰者ですから、やはりその中で伏せ込みができます。上級教会でもそうでしょう。

しかし、自教会に帰れば、大半が家族だけです。毎日一緒に住むのは、ほぼ自分たち家族しかいません。もちろん月次祭になれば、

ようぼく、信者さんや上級、部内の会長さんが来るでしょうが、それ以外のほとんどの時間は家族だけです。

そして、教会から一歩出れば、大半がお道を信仰していない人たちです。周囲にお道の雰囲気がある場所に身を置けば、ある程度任せておけば、それなりに仕込んでもらって帰ってくるけれども、我が教会にいれば、家族や信者さんと接するだけで、あとは圧倒的に、お道を信仰していない人たちの中で生活をしていくのです。

自分の子供を育てる責任

おぢばに住む子弟が少ない、また大教会や上級教会で伏せ込む子弟がだんだんと減ってきている。そう思えば、我が教会できちんと我が子を育てていくという責任が一段と重くなってくると思います。これが緩んできたら、どんどんと道から離れていく子弟が出てくるでしょう。事情教会のような状況の教会も増えてくると思います。

それぞれがしっかりと自分の子弟を育てるという気持ちを新たにしなければ、末代の理と教えていただく道が衰退していくことになりかねません。

子弟を育てていく責任は重大です。殊に部内教会があるところは、部内の子弟にまでしっかりと心を配らなければなりません。

私が会長になって数年した頃、専修科を出てから大教会青年を２年間してくれた子がいました。彼に「青年の人数も少ないから、もう１年残ってほしい」と頼むと、「残らせてもらいます」と言って残ってくれました。

彼は「地元に帰ったら、本当に安心していただけるような教会長になりたい」ということで、天理高校を出て、専修科に入って、そして青年勤めも喜んで残ってくれました。会長宅に呼んで、「頑張れよ」と言って、２人で一杯飲んで激励したこともあります。

そして大教会青年の勤めを終えて教会に戻りましたが、やはり道一条で頑張って通れたのは半年くらいでした。

だんだんとアルバイトに行くようになりました。ひのきしんも一生懸命する青年でしたから、仕事も一生懸命する。それで頼られるようになって、アルバイトの中でも上の立場になり、会社から「正社員になってくれ」と頼まれて正社員になった。そして、出会った彼女が他宗教の信仰をしており、教会におれなくなった。結婚しても奥さんが絶対に反対ですから、おぢばにも帰れない。とうとうお道から離れざるを得なくなりました。

こういう事例があるように、やはり教会に戻ったとしても、教会長である親が、また周囲が協力をしながら、しっかりと後継者、道の子弟を丹精して育てていかなければ、こうしたことは起こり得ます。

殊におぢばや上級といった、お道の雰囲気の中で過ごさないまま後継者になり、教会長になる人が、これから増えてくると思います。

そうしたことから、子弟を育成することについて今一度考え直さなければならない時期だと思います。これは教祖百四十年祭を越えてからの大きなお道の課題ですから、しっかりと心に置いてもらいたいと思います。

おぢばで過ごす意義

昨年、道の子弟の育成の上で、中田善亮・表統領先生が、「とにかく子弟を親里で過ごさせてやってほしい。高校もあれば大学もある。本科もあれば、専修科もある。また本部勤務もある。子弟にはおぢばでしっかりと過ごせるようにしてほしい」と訴えかけられました。その理由は、「おぢばで生活をすれば、おぢばが本当の故郷になるからです」というものでした。

それまでは、おぢばは帰るところで、「ただいま帰りました」と言って帰らせてもらうところでしたが、中田先生は「おぢばに住むことによって、親里が自分の第二の故郷になる。これは信仰者として非常に大切なことだと思う」と、このようなことを仰せられました。

やはりおぢばで過ごす、おぢば

で伏せ込むことは大切です。もちろん、いろいろな形があると思いますが、そうした機会をつくっていくことが、育成していく側の一つの役割ではないでしょうか。

おぢばで過ごした人間は、たとえ一時、社会に出ても、何らかの折に必ず帰ってくるきっかけがあると思います。おぢばで過ごすことなく、全く何もないまま社会に出て、世間に入ってしまえば、戻るのはなかなか難しいのです。

もちろんそういう中でも、身上や事情などの節を頂いて、戻ってきてくれる人もあるわけですが、「おぢばで学んだ人、勤めた人は、親神様がその人の魂に印を打ってくださる」と前真柱様が仰せになった通り、おぢばで過ごすことが、将来必ず生きてくると思います。

先ほど申した、ある教会の後継者も、今は道から離れたような形です。しかし、奥さんに分からないように、何度かおぢばに帰ってきてくれました。会長宅にも顔を出して、「会長さん、すいません。いずれ必ずお道を信仰できるようにならせてもらいます。それまでちょっと待ってください」と言ってくれたこともあります。やはりおぢばで学び、伏せ込んだからこそ、そういう気持ちになれるのだと思うのです。

おぢばで学び伏せ込む。またそうした雰囲気の中、大教会や上級教会など、信仰者のいるところで育てていくことも非常に大切なことになると思います。

とりもなおさず、まず教会長自身が責任をもって、しっかりと自分の子弟を育てていく、道を伝えていくという努力を重ねさせてもらいたいと思います。

心が変わらねば末代まで

教会のお目標様にお戻りいただくという厳しい節を通して、私は「末代の理」ということを何度も考えました。

実は、本部の中で、教会統合・お戻りについての会議の中に、私も入れてもらっていましたので、いろいろと話し合いをしました。その中では「末代の理としてお許しいただいたものを、人間の都合で切ってしまっていいのか」という意見も出ました。

しかし、おさしづに、

心違わねば末代子孫に続くで。

明治20年6月13日

と仰せいただきます。これは芦津大教会の初代様が頂戴したおさしづの一節です。逆に言えば、心が変わったら、末代の理が末代でなくなる、という意味だと思います。「心が変わらなければ、理は末代である」ということを、私たちはしっかりと心に置き、自分の確たる信仰信念を持たねばなりません。

そのためにも、しっかりと子弟を育てる。我が子を育てる。部内教会の子弟を育てる。ようぼく、信者の子供たちにもしっかりと道を繋ぐ。しっかりと心を配り、苦心をし、工夫をしながら、お互い、丹精、育成に励ませていただきたいと思います。

人をたすけ、人を育てる

教祖はひながたの道において、何に心を砕かれ苦心なさったのでしょうか。それは、大きくくれば、人をたすけることと、人を育てることです。その内の人を育てるという、育成・丹精をしっかりと勤めさせていただきたいと思います。

それぞれ、子弟育成の上に、一層ご尽力くださいますことをお願いいたしまして、今日の挨拶とさせていただきます。

どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。

（要約）

あしつスプリングフェスタ　開催

3月27日より30日まで、育成部（山田道弘部長）は、春の若年層育成期間「あしつスプリングフェスタ」を開催。期間中、若者たちを育てるためのさまざまな行事を実施した。

HAPPY徒歩団参

3月27日、学生会を中心に大教会からおぢばへの徒歩団参を実施した。今年からは中学生も参加し、13歳から22歳までの学生層32名、スタッフ17名、計49名が参加した。

午前9時30分、大教会神殿に集合。4班に分かれて自己紹介をした後、おつとめを勤めた。武波直輝・学生会委員長が「コロナ禍でなかなか繋がりが持てなかったが、徒歩団参をきっかけに多くの人と繋がりを持てるようにしよう」と挨拶し、マイクロバス2台で大教会を出発。十三峠の登り口からおぢばへ向けて歩き始めた。

前日の雨で少しぬかるんだ箇所もあったが、学生たちは厳しい急勾配の山道を励まし合いながら歩いた。展望台で記念撮影の後、下り坂では学生同士が和やかに話しながら歩く姿が見られた。

平群スポーツセンターで昼食後、再びバスで移動。奈良県浄化センターから、再度おぢばを目指し歩き始めた。午後4時、大教会長が出迎える中、本部神殿前に到着。約13㎞の道のりを全員が無事に歩き切った。

参加者からは「久しぶりにいろいろな人と顔を合わせて話ができて、楽しかった」「新しい友達ができた」などの感想が聞かれた。

春の学生おぢばがえり

3月28日、「次代を担うようぼくへ」をスローガンに春の学生おぢばがえりが3年ぶりに本部中庭で開催され、芦津直属隊として23名の学生が参加した。

式典では、真柱様より道の学生に対してメッセージを頂戴した。メッセージの中で真柱様は、思召に適う心の使い方、信仰的にどのように成長するかなど、心を磨いて教えを人生に生かす考え方を身に付けてもらいたいと話され、元気にこの道を歩み、先に繋いでいってほしいと願われた。また「道の学生の歩み」では、2名の学生が里子としてこの道に入り、周囲への感謝の思いを発表した。

式典終了後、学生たちは詰所で自己紹介やゲームなどで和やかな時間を過ごし、交流を深めた。

昼食後、バスで豊田山墓地に移動し、教祖や歴代真柱様の墓前で参拝。続いて井筒家の墓前で初代会長様が入信した経緯や、歴代会長様についての説明を受け、参拝した。その後、斎場とその周辺で、落ち葉掃きひのきしんに汗を流した。

最後に武波委員長が、参加者にお礼を述べ、「今日の繋がりを大切にするために、コロナ禍でもできる行事を企画するので、ぜひ参加してほしい」と今後の活動への参加を促した。

わかぎの集い

3月29日、中学生を対象にした「わかぎの集い」を日帰りで開催。中学生16名、高校生、大学生スタッフ12名が参加した。

午前10時、大教会神殿で開講式の後、おつとめ練習。座りづとめのおてふりを全員で練習した後、よろづよ八首のおてふりと、鳴物の基本練習を分かれて行った。

その後、陽気ホールでウォーミングアップ。簡単なゲームをした後、3班に分かれ自己紹介、班対抗しっぽ取りなどを行い、参加者の顔も明るく和やかな雰囲気に。

昼食は、食堂でおもちゃの電車を使った回転寿司。参加者たちは、目の前を通るお寿司やデザートを食べながら、「魚へんの漢字読みクイズ」で楽しんだ。

午後からは大阪城を見学。班ごとに大阪城を見学した後、大阪城にまつわる班対抗クイズ大会。城内で見学してきたことを頼りに班ごとに解答し、大いに盛り上がった。

閉講式では大教会長が、3年振りにわかぎの集いを開催できた喜びを話された後、参加者に対して、「人のために動ける人になってもらいたい」と期待を述べられた。

第50回記念 少年会芦津団総会

3月30日、少年会芦津団（加世田洋団長）は大教会で第50回記念総会を開催し、少年会員140名、育成会員148名、計288名が集まった。

午前10時、瀧本周佑君（紀周隊）が開会の辞を述べ、祭主・西本崇之君（尼崎隊）、扈者・奥田元郎君（豊野隊）、山下保君（芦山都隊）が入場し、祭文を奏上。

その後、座りづとめ、よろづよ八首に分かれて、おつとめ衣を着けた少年会員がおつとめまなびを勤めた。

式典では、少年会長様の御告辞を加世田団長が代読。その後、大教会長が、「総会のために練習したおつとめを忘れず、将来教会でおつとめを勤めるようぼくを目指してください」と話された。次に、お供え作品展入選者を代表して小村真生さん（吉野川隊）に、大教会長から賞状と記念品が授与され、その後、天津隊の少年会員4名が元気よく「ちかい」を述べた。

続いて、今春中学校を卒業する門出生を代表し、日樫清幸君（鎮名隊）と木村春陽さん（芦明徳隊）が教祖の御前で「門出の言葉」を述べた。この後、第50回を記念してピッキーとリボンから届いたお祝いメッセージを上映。少年会の歌を斉唱し、湯川桃代さん（日方隊）が閉会の辞を述べた。

この後、門出生は対面所で「成人門出式」を行った。

昼食は弁当が配布され、午後からのお楽しみ行事では、参道にピッキートランポリンが登場。大勢の少年会員が楽しいひとときを過ごした。

また50回を記念し、神殿南側廊下に「少年会芦津団の歩み」と題した年表を掲示した。年表は、引き続き「芦津大教会公式ホームページ」で閲覧できる。

会長室報

青年勤務辞退

【大教会】

北村　真彦（芦　姫）

立教185年２月23日

【詰　所】

山本　和広（昭　大）

立教185年３月26日

本部勤務辞退

【海外部】

白髪　陽亮（芦眞勇）

【教校学園高校】

吉田　弘人（紀野本）

【青年会本部】

山田　元喜（當　別）

立教185年３月31日

本部勤務

【ひのきしん寮】

森　弘子（直　轄）

立教185年３月１日

【営繕部】

多川　勇介（善　徳）

北村　健治（芦　姫）

【海外部】（ひのきしん）

洪　里美（真明彰化）

洪　里佳（真明彰化）

立教185年４月１日

教務部報

修養科教養掛（１～３月）

教養掛主任

井筒　文夫

教養掛

奥田　正儀・北村　浩

木村　真次・山田　実臣

井筒ちぐさ

教人資格講習会第119回修了

齊藤　涼子（髙　清）

北村　健治（芦　姫）

立教185年３月13日

修養科第967期修了

知念　絹枝（沖　縄）

知念　望（沖　縄）

立教185年３月27日

初席《２月》

〈８名〉直轄

〈２名〉二名

〈１名〉芦明徳

（順序運びより　11名）

■訃　報■

大教会役員

四ツ山分教会六代会長

山本範男氏（やまもとのりお）

令和４年３月13日出直された。87歳。告別式は、３月18日大教会長斎主のもと、大教会で執行された。

氏は、昭和10年３月24日父・山本一男、母・浅子の長男として、大阪市西区新町に生まれ、昭和28年12月19日おさづけの理拝戴、同月修養科第150期修了、29年６月教師補命、37年10月瀧本政子と結婚、61年９月大教会役員に登用された。平成３年６月四ツ山分教会六代会長に就任、ようぼく、信者、部内教会の丹精に尽力された。

修養科一期講師、本部詰員を勤められ、大教会においては育成部、庶務部、祭事部長を歴任。また、大教会四代会長、五代会長の運転手として仕え、永年大教会の御用の上に懸命に勤められた。

月例統計（自令和４年１月１日～至令和４年２月28日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	6		
靱（13）				
東津（23）	1	2		
吉野川（29）		1	1	
島原（16）	1			
日方（15）	3			1
稗島（7）				
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）				
門司（6）	1			
當別（6）				
大島（26）		1	1	
沖縄（3）				
尼崎（2）				
四ツ山（5）		1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）				
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1			
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1			
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	19	13	2	2

少年会芦津団野外練成会

さんさいの里デイキャンプ　5.28（土）

☆場所：さんさいの里　☆参加費：1000円

☆対象：小学４年生～中学３年生　☆定員：30名

☆内容：野外活動ゲーム、キャンプファイヤー他

☆申込：申込書、同意書を大教会へ（5.23締切）

右のＱＲコードを読み取るか、芦津大教会公式ホームページの「少年会芦津団」より、要項・参加申込書・同意書が、ダウンロードできます。